

共通教育科目「哲学基礎 B」の2012年度2学期木曜1時限 入江幸男
「現代形而上学概説」
第3回(20121018)

<学生のコメント>

前回の授業でおっしゃっていた、哲学という言葉の始まりのこと、哲学基礎 A のノートをめくってみると、ヘラクレイトス断片35「智を愛し求める者は、実に極めて多くのことを探究せねばならない」
→ピタゴラス「學術の心得は自分にはひとつもない。ただ私は愛知者なのだ」と書いてありました。
(須藤先生に感謝！)

§3 永井均の〈私〉のメタフィジックス(続き)

■復習

①「私」の独我論:「私」と同様の心を持つように見える他者は、本当は存在しないという考え。

この独我論を信じている人に、独我論を間違っていることを証明することは困難である。

②〈私〉の独我論:私と同じようなところを持った他者が存在する。私は、多くの人間の中の一人である。しかし、〈私〉にとっては、〈私〉は他の人とは異なる特別な唯一の存在である。

②の理解の難しさは、②が誰にも理解できる立場だとすると、誰もが〈私〉を持っており、〈私〉のかけがえのなさが、<各人にとっての自分のかけがえのなさ>というようなものへと一般化されてしまうことにある。

「「私」概念の文法的-論理的な特殊性がこの私の存在の特殊性を隠蔽してしまう、と言ってもよいが、それではその「この私の存在」の特殊性を「私」概念の文法的-論理的な特殊性を離れて語りうるかといえ、それはできないのである。」(永井均『〈私〉のメタフィジックス』26)

「それならばいっそのこと、「この私の存在」の特殊性などはじめから存在せず、それは単に「私」という概念の文法的-論理的な特殊性の影にすぎない、というべきではないのか。・・・あるいはそうかもしれない。」(同頁)

「あるいはそうかもしれない。だが、重要なことは、それは可能ではないという意識、ただひとつの例外としてのこの私の存在(それのある私の存在との差異)は何ものにも還元されはしないという意識こそが「他我問題」の背後に隠れていて、その問題に論理的な分析では解決のつかないある深みを与えている、という事実である。」(同頁)

永井は、〈私〉が複数存在していると考える立場を「諸主観離在論」あるいは「認識論的独我論」と呼んで批判する(永井均『〈私〉の存在の比類なさ』 p.66)。

永井とは逆方向からの「諸主観離在論」を否定する議論を紹介したい。

§4 「共通知識」と「共有知」

(入江幸男「知を共有するとはどういうことか」『メタフシカ』大阪大学哲学講座発行、37号、pp.1-15より)

1 「共通知識」と「共有知」

(1) 「共通知識」の定義

まず「共通知識」を定義しよう。次の二つが成立している場合を、 p は a さんと b さんの「共通知識」であると言うことにする。

(1.1) a は p を知っている。

(1.2) b は p を知っている。

例えば、 a も b も、 p 「ブータンの首都がティンブーである」を知っている場合である。この場合に、さらに、 a がそのことを知っていることを、 b が知っていることもあれば、知っていないこともある。どちらであっても(1.1)と(1.2)が成り立っていれば、「共通知識」であると呼ぶことにしよう。

ここで更に次のことが成立しているとしよう。

(1.3) a は(1.1)と(1.2)を知っている。

(1.4) b は(1.1)と(1.2)を知っている。

このとき(1.1)と(1.2)が a と b の共通知識である。もちろん、ここにおいて p もまた a と b の共通知識である。上の(1.1)～(1.4)を次のように書くことが出来る。

(2.1) p は a と b の共通知識である。

(2.2) (2.1)は a と b の共通知識である。

場合によってこのような操作をさらに繰り返すことが出来る場合もあるだろうが、しかし、共通知識であるときには、その繰り返しが常に可能であるとは限らない。

(2) 「共有知」の例示とルイスによる定義

さてここで、もう一度最初から考えてみよう。 a が b に「ブータンの首都はティンブーですか」と問い、 b が「そうだよ」と答えたとき、 a も b も p 「ブータンの首都はティンブーである」を知っているだけではなく、 p が a と b の共通知識であることも、 a と b にとって自明である。さらに、この自明であることも、 a と b にとって自明であるだろう。この場合には、必要に応じて何度でもこのような反復を行うことが出来るだろう。この場合に、 p を a と b の「共有知」と呼ぶことにしたい。

このような共有知についての議論の先駆けの一つは、D. ルイスによるものである。彼が挙げている例は、次のようなものである。

「あなたと私がい、私達は一緒に話をする。しかし、あなたは我々のビジネスが終わる前に去らなければならない。そこで、あなたは、あなたが明日同じ場所に戻ってくる、と言う。このようなケースを想像してみよう。明らかに、私はあなたが戻ってくることを期待するだろう。また、あなたは私が戻ってくることを期待するだろう。あなたが戻ってくることを私が期待することをあなたが期待することを私は期待するだろう。ひょっとすると、さらに一、二階高次の期待があるかもしれない。」⁽²⁾

ルイスがここで「共有知」と呼んでいる知について、シファーは「相互知識」という名前を与えて少し異なる定義をしている。また、そのシファーの定義を批判して、スペルベル&ウィルソンは、「相互に顕在的な想定」という名前を与えて別の定義をしている。また、トゥオメラは、「相互信念」という名前を与えて別の定義をしている。しかし、彼らに共通するのは、彼らが共

通の知識や想定や信念を、個人の知識や想定や信念によって説明するということである。中山康雄の「集团的志向性」の定義もまた、おそらく集团的志向性を個人的志向性によって説明する立場だろうと思われる。しかし、共有知を個人の知に還元して、個人の知から出発して共有知を構成することは、本当に可能なのだろうか。

これに対してJ. R. サールは、集团的志向性を個人的志向性に還元することは不可能であると主張し、「集团的志向性は、生物学的に原初的な現象である」⁽⁶⁾と主張する。

私は、集团的志向性は「生物学的に原初的な現象」であるだけでなく、言語的に原初的な現象だと考える。なぜなら、我々の知や知覚は、感覚の理論負荷性を考えても解かるように言語の習得に依存しており、この言語の習得は集団に依存しているからである。

以下では、まず共有知を個人の知に還元することの不可能性を指摘し、次に、個人を越えた知、という奇妙かもしれない考えの可能性について検討したい。

知はあくまでも個人の知であるという立場に立つならば、 a が b が「ブータンの首都はティンブーである」と知っていること \succ を知っているとき、 $\prec b$ が「ブータンの首都はティンブーである」と知っていること \succ は、 a の知であり、この中の「ブータンの首都はティンブーである」もまた b の知に関する a の知である。 b の知そのものを a は知ることが出来ない。

この立場では、知の共通性というものは、あくまでも個人が想定するものである。この立場では、 b の知の内容のみならず、更に b が知をもつことや、 b が a と同じようなものとして存在することもまた、 a の想定に留まることになるだろう。この立場を「認識論的独我論」と呼ぶことにしよう。この立場に立って同時に、存在の上でも私しかいないという「存在論的独我論」を採るのであれば、立場としては整合的であろう。しかし、もし認識論的独我論の立場で、複数の自我の存在を認めるとすると、それは主張として整合的なのだろうか。（この立場が、永井の言う「諸主観離在論」になる）。

2、認識論的独我論と存在論的複数自我論は両立不可能である

(1) 現象学への批判

フッサールが言うように、世界や対象や他者を構成的に総合する超越論的自我が複数存在しているのだと仮定してみよう。この立場をかりに、「超越論的複数自我論」と呼ぶことにしよう。

しかし、他者が超越論的自我であるとしても、それは私にとってそのように構成されるに過ぎない。つまり \prec 超越論的自我が複数存在している \succ ということもまた、超越論的自我である私による構成である。従って、この後者の超越論的自我こそが、実在する超越論的自我である。他者達である超越論的複数自我は、私が構成したものにすぎないという立場を「超越論的独我論」⁽⁸⁾と呼ぶことにしよう。フッサールは、彼の立場が「超越論的独我論」であるという批判に反論して、(彼の用語ではないが)「超越論的複数自我論」の立場をとろうとしている。

しかし、フッサールの立場からするならば、これらの複数の超越論的自我が存在することもまた、超越論的自我によって構成された事実に過ぎないはずである。そうするとやはり「超越論的独我論」になってしまうのではないだろうか。もちろん、更にこのような超越論自我が複数存在すると想定することは可能である。そうすると、同様のことが無限に反復することになる。この無限の反復は、超越論的複数自我論と超越論的独我論の間を揺れ続けることを意味するだろう。

この二つの立場の間を揺れ続けることは、生き方としてはありうる態度だろう。しかし、それは理論的な立場としては成立しないだろう。なぜなら、もし私がこの揺れ続けることを一つの立場として採用するとき、その立場を採用するのは私であり、その立場はまたしても私の想定に過ぎず、メタレベルで独我論に戻ってしまうからである。ここで私が独我論を取るまいとするならば、私は私の外部に、私と同様に動揺している他者を想定することになるだろう。しかし、また

してもこの想定が、私の想定に過ぎないことを自覚することになる。こうしてまた揺れ続けることになる。つまり、揺れ続けることは一つの理論的な立場にはなりえないのである。

我々は、認識論的独我論と存在論的複数自我論は両立し得ないと結論できるだろう。

ここで言いたいことを明確にするために、別の言葉で表現してみよう。もし全ての志向性が個人の心の中にあるのだとすると、我々は、集团的志向性を、個人的志向性に還元して説明しなければならないだろう。しかし、実はそれだけにとどまらない。もし全ての志向性が個人の心の中にあるのだとすると、この考え自体もまた、ある個人の心の中にあるのである。そして、その者は、自分と同じように考えている心が複数あると想定することが出来るが、しかし、その想定もまた彼の心の中の志向性にすぎないのである。つまり、全ての志向性が個人の志向性だとすると、つねに独我論に舞い戻ってしまい、志向性を持った諸個人が存在するという想定、つまり個人的志向性から集团的志向性を構成すること自体が、個人の想定になってしまうのである。以上の議論が正しければ、<全ての志向性は個人の志向性であるから、個人的志向性から集团的志向性を構成する>という主張は、自己論駁的なのである。

では、どのようにして我々は複数の自我の存在を想定したり、知ったり、主張したりできるのだろうか。もしその想定や知や主張が個人によって行われるのだとすると、我々はまた認識論的な独我論に舞い戻ってしまのだから、これを避けるには、<その想定や知や主張は、個人によって行われるのではなくて、個人を超えたものである>と考えるしかないのではなかろうか。

この可能性を、以下で検討してみよう。

3、対象の共有と記述の共有

(1) 我々は同一の花瓶を見ているのではないのか。

ここで、知覚について考えてみよう。我々は、知覚を他者と共有することは出来ないだろう。しかし、我々は同一の花瓶を見ているのではないのか。仮に、aとbが一つの部屋におり、一つの机に向かい合って座っており、その机の上には一つの花瓶があるとしよう。日常生活では、人々は通常は、一つの対象の異なる知覚像もっているとは考えず、同一の花瓶そのものを見ていると考えているだろう。このとき、aとbは、同一の花瓶そのものを見ている。彼らは、花瓶を別の角度から見ていることは知っている。彼らは通常は、花瓶そのものでなく、花瓶の知覚像だけが与えられているのだとは考えていない。ただし、反省すれば、aとbは、花瓶そのものを見ているのではなくて、花瓶の知覚像だけが与えられているということに同意するだろう。

ところで、aとbが同一の花瓶の異なる知覚像をもっていることを反省したときにも、それは、同一の花瓶の異なる知覚像なのである。aとbは、そこに一つの花瓶があつて共にそれを知覚していると考えている、つまりaとbが同一の花瓶を知覚していると考えている。では、彼らがそのような考えることは、どのようにして可能になるのだろうか。

そのような考えがどのように発生するのかを説明するものではないが、発生したそのような考えを保持し確証することは、aとbが同一の花瓶を知覚していることについてaとbが同意することによって可能になっている。なぜなら、もしaがこの同意を期待していたのに、bが「私が見ているのは花瓶ではなくて机です」とか「私には机の上にも何も見えません」などと言って、同意が得られなかったならば、aは、bが同一の花瓶を知覚していることを疑い始めるだろう。したがって、知覚対象の共有は、言語による世界記述の共有を必要条件として前提している。

(2) 言語による世界記述の共有は、どのようにして可能になるのか

では、言語による世界記述の共有は、どのようにして可能になるのだろうか。予想される一つの答えは、〈一つの花瓶を複数の人が知覚するように、一つの命題を複数の人が理解する〉という答えである。例えば、フレーゲは命題の意味としての思想が客観的に存在すると考えていた。⁽⁹⁾しかし、このように考えても問題は解決しない。例えば、「 $5 + 7 = 12$ 」を a と b が理解するとき、フレーゲならば、a と b は共に客観的に存在する一つの思想を考えていると言うだろう。しかしその場合、a と b はその客観的な思想をどのようにして理解するのだろうか。何か神秘的な理解が可能だとして、a や b がその客観的な思想を正しく理解していることは、どのようにして保証されるのだろうか。また、a は、b もまた自分と同じようにその客観的な思想を正しく理解していることをどうやって知ることが出来るのだろうか。

これらは、実際には、その命題について、a と b が議論することによって、命題の意味の理解が一致していることを確認することによるしかないだろう。しかし、そうだとすると、それを確実に確認することは不可能である。そのとき、理解の一致は a の個人的な想定に過ぎないことになるだろう。

もし我々が言語による世界記述を共有していると確実に言えるのだとすれば、我々は知のあり様を別様に考えなければならない。a と b がある知を共有するといえるためには、a と b が共にその一つの知を知るのだからなければならない。これは確かにこれまでの認識論の常識に反する主張である。そして、以下でそのような知の存在証明が十分にできたとは言えないのだが、その候補となる一つの実例を示したい。